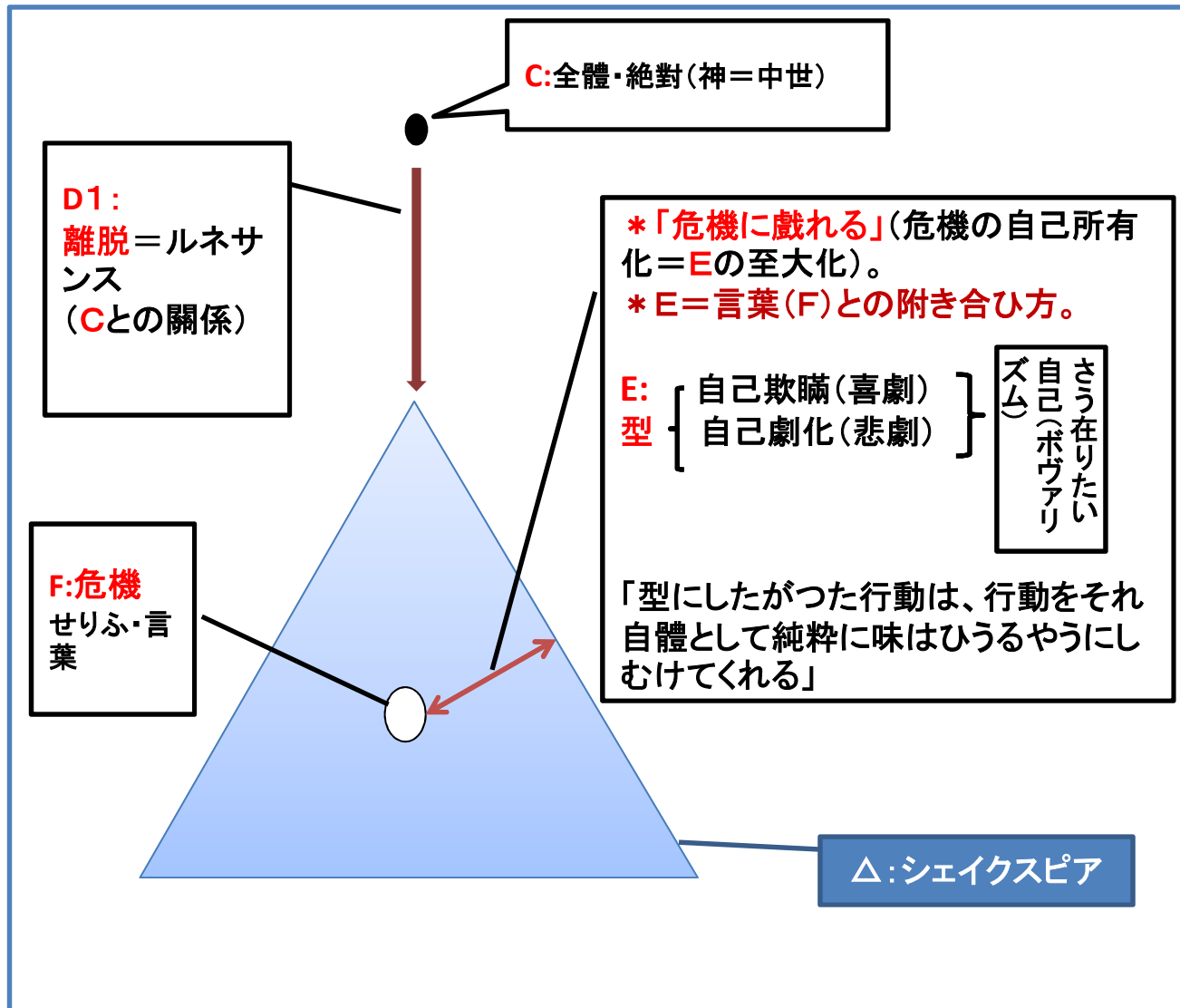


「彼(シェイクスピア)が劇場に期待したことは、危機から自分を救ひ出すことではなく、危機と戯れることであった。シェイクスピアのせりふが詩でありえたのは、そしてその詩がせりふでありえたのは、彼が言葉といふものを危機の表明や解決の通路としてではなく、その中に危機を呼び入れ、それと戯れるための場として把握してゐたからである」・・・とは以下圖(説明は右項)の様に捉へられる。



「**「せりふの中に危機を呼び入れる」「危機に戯れる」**とは以下の様に換言出来る。・・・

* 場(**C**)から生ずる「**関係(D1)**」と稱する實在物(**離脱**)は潜在的には一つのせりふ(**「危機」**)によつて表し得る」。故にその言葉との付き合い方、即ち「型にしたがつた行動」による言葉(危機)の自己所有化で、**関係(離脱)**への適應正常(**危機に戯れる**)が叶へられる。(全七P300『せりふと動き』)文を利用)

~~~~~

参照文:

\* 場から生ずる「**関係(D1)**」と稱する實在物は潜在的には一つのせりふ(言葉)によつて表し得る」(全七P300『せりふと動き』)。

\* 場から生ずる「**心の動き(関係)**」を形のある『物』として見せるのがせりふの力學」(『せりふと動き』)。

\* この二つを合はせ要略するとかうなる。せりふ(言葉:F)との附合ひ方、扱ひ方(E)、即ち「フレイジング」「so called=所謂何々」「型にしたがつた行動」の用み方の適不適で、場との**関係(D1)**を適應正常化(非沈湎)させる事が可能となり、また反對に**適應異常(沈湎)**に陥らせる事にもなり得る。